

## Ⅱ．事業の概要

### 2-1. 事業報告

---

#### 京都文教学園

##### 1. 学園中長期経営改善計画の策定

学園では決算状況が近年低迷する中、財政基盤を中心とした立て直し策として、中長期経営計画の策定が急がれていましたが、平成29年度は検討委員会設置のもと待望の向こう5ヵ年の計画が出来上がりました。この計画では、各設置校による人件費比率や定員充足率などの具体的な数値目標の明示と、各設置校が独自にそれぞれの計画を策定しました。

この計画は、毎年決算期の事業報告で進捗が明らかにされ、遅れが生じればその遅れを取り戻す施策を検討していきます。これによって、5年後の学園のあるべき姿に着実に向かうべく、平成30年度から実施することになりました。

##### 2. 組織改編と各委員会の設置

上述の中長期経営改善計画を学園全体で推し進めるために、法人内に経営改善推進室を設け、常勤役員が就任しました。また、単に数値目標の達成を目的とするのではなく、学園の組織力と教育力の強化、及び教職員の資質の向上を図り経営基盤を強化する観点から、教職員人事評価制度検討委員会を立ち上げ、更に大学短大に共通する教学部門と事務組織の効率化を検討し、かつ実践するために宇治キャンパス将来構想委員会を立ち上げる等、これから学園が教職員一体となって経営改善に取り組んでいくうえで、実施していくべき方策を決定していく為の会議体を発足させました。

##### 3. 学園資料館の設置準備

校祖獅谷佛定上人が明治37（1904）年に設立された本学113年の歴史を振り返り、それを受け継いで次世代に伝えていく使命を担って、岡崎キャンパスに昨年度竣工した新6号館2階に、学園資料館が設置されることとなりました。この資料館には本学に所縁のある展示物をはじめ、歴史的にも貴重な品の数々が展示されることとなります。浄土宗宗門各校からの注目も浴びて、平成30年6月にオープン予定です。

# 京都文教大学

本学の教育目標は「ともいき人材」の育成である。この教育目標をより確かに実現すべく、平成30（2018）年度から5年間の第Ⅱ期中期計画を策定し、本学のミッション、ビジョンを再確認するとともに、マスタープランとしての基本戦略、重点戦略、到達目標を明確に示した。また、3ポリシーに基づく教育を実質的に機能させる体制を整えるために、カリキュラムマップの作成をはじめ教学に関する諸課題に取り組み、事務局部門もその実現に向けた取組を強く推し進めた。

さらに、次期の認証評価を受審するための基準年を迎えるに当たって、新しい大学評価基準を踏まえた教学マネジメントを機能させるべく、新たな委員会の設置や規程の整備等、各学部ならびに部局におけるPDCAサイクルの実質化を推進する体制を整えた。

## 1. 教育・研究の充実と活性化のための事業

(1) 総合社会学部では、学生支援ならびに学生ニーズにあわせた学生対応を更に強化した。具体的には、①大学間連携事業「地域公共政策士およびグローバルプロジェクトマネージャー資格教育プログラム」の推進、②公共政策コースと親和性の高い公務員養成プログラムの開設と運営、③国際文化コースと親和性の高い日本文化・日本語教師養成プログラムの開設と運営、④初年次教育とゼミ教育の充実等を行った。

(2) 臨床心理学部では、臨床心理学科において、①学生確保に向けたコース再編およびコースごとの入試実施、②コース再編に合わせて公認心理師資格取得に向けたカリキュラムの再編成③心理学検定を学生が利用しやすいようにセッティングし、学部教育の充実に向けて取り組んだ。

教育福祉心理学科においては、①小学校教育実習・保育実習・PSW実習の3種の実習に対する各コースの現場実習体制等の整備と役割分担の明確化、②幼稚園教諭免許課程設置に向けたカリキュラムの再編成について、新学部検討委員会の中で、短大教員と共同で国の新制度に準拠した新学部設置時のカリキュラム案の作成を行った。

(3) 文化人類学研究科では①留学生の日本語能力・学習面・生活面におけるきめ細かなサポート（本学学習支援室および学外チューターによる日本語の学習、奨学金の申請）、②大学院生のフィールドワークの質向上のため、指導教員を中心とした全研究科教員によるフィールドワーク実施の前・後に指導を強化した。また、留学生指導のためにFD研修会「大学院における留学生指導について—大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻の事例を基に—」を行った。また奨学金に関しては、文部科学省の学習奨励金（平成29年10月～平成30年3月）、米山ロータリー奨学金（平成30年4月～平成31年3月）および一般財団法人福建会館奨学金（平成30年4月～平成31年3月）の受給が決定した。

(4) 臨床心理学研究科では、従来の臨床心理士養成のさらなる充実を図るとともに、①公認心理師養成に応じたカリキュラムの見直しと実習先の開拓および関係構築の促進、②本学学部の大学院進学希望者に対する実質的な進学支援を進め、今年度大学院合格者の内部進学率を高めた。

(5) FD活動として、下記の取組を実施した。

### A) FD研修会

下記7件の研修会を主催や共催の形で実施した。

- ①「全入時代における初年次教育の課題と実践のヒント」（主催）
- ②「全盲学生への授業支援についての懇談会① ～視覚教材～」(共催)
- ③「教職学しゃべり場 ～良い授業とは?～」(主催)
- ④「全盲学生への授業支援についての懇談会② ～定期試験～」(共催)
- ⑤「大学におけるセクシュアル・マイノリティ学生の支援」(主催)
- ⑥「大学院における留学生指導について—大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻の事例を基に—」(共催)
- ⑦「全盲学生への授業支援についての懇談会③ ～次年度に向けて～」(共催)

### B) 授業アンケート、課題別ワーキング

例年どおり授業アンケートを実施し、当該科目担当者にフィードバックするとともに、

報告書を作成した。シラバスWGでは、私立大学等改革総合支援事業に対応する取組を行った。

C) 学生FD活動支援、準正課支援

学生FD活動（FSDプロジェクト）を支援し、教職学しゃべり場の開催、学生FDサミットへの送り出し、FSDブックレットの発行などを支援した。また、大学間連携GP『西日本から世界に翔たく異文化交流型リーダーシップ・プログラム』（通称UNGL）活動を支援し、多くの学生を国内外に送り出した。

(6) 全学共通教育においては、「科目間連携」および「共通教育と学部プログラム間連携」の促進のため、①連携の可能性が高い科目の授業担当者同士による実務レベルのコミュニケーションの促進、②コミュニケーションの成果を測る調査の計画・実施、③学部プログラム間の相談および折衝を要するため保留となっている事項の解消を進めた。

①については、10月30日に「大学入門」、「書く技法」、「初年次演習」の担当者を中心に「導入教育」に携わる教職員によるミーティングを、また1月17日には「大学入門」、「仏陀と法然に学ぶ人間学」、「キャリアと自己形成」の担当者を中心に「アイデンティティ教育」に携わる教職員によるミーティングを行い、すでに進めてきた科目間連携の状況を共有した。こうしたミーティングの機会を持ちつつ、授業期間中には各授業内で用いる教材や課題内容、口頭指導等において連携的要素の盛り込みを意識した。

②その成果を測る無記名アンケートを年1月17日と21日に「キャリアと自己形成」履修者を対象に実施した。その大まかな結果は以下の通りであった。(i) 総合社会学部および臨床心理学部生に対し『「キャリアと自己形成」と『地域入門』のつながりを有意義に感じましたか』という質問をしたところ、「強くそう思う」と「そう思う」という肯定的回答で答えた人の割合は総合社会学部73.0%、臨床心理学部68.8%であった。(ii) 総合社会学部生に対しとくに連携を意識した2科目に関連して、『「キャリアと自己形成」と『プロジェクト科目』のつながりを有意義に感じましたか』という質問をしたところ、上記と同じ肯定的回答で答えた人の割合は68.3%だった。(iii) また臨床心理学部生に対しとくに連携を意識した2科目に関連して、『「キャリアと自己形成」と『仏陀と法然に学ぶ人間学』のつながりを有意義に感じましたか』という質問を行ったところ、上記と同じ肯定的回答で答えた人の割合は50.8%であった。(iv) 総合社会学部および臨床心理学部の学生に対し『「大学入門」と『地域入門』のつながりを有意義に感じましたか』という質問をしたところ、肯定的回答で答えた人の割合は総合社会学部63.1%、臨床心理学部69.7%であった。これに付随して、各回答理由のコメントも集めることで、科目間連携を今後さらに向上させるための基礎資料を得た。

③については、共通教育、総合社会学部、臨床心理学部の各プログラム間で今後の科目設置につき折衝を要した旧共通教育カリキュラムの社会科学系5科目に関する合議がなされた。そこで平成30年度以降の対応が確定し、懸案事項が解消された。

(7) 高校教育と大学教育の円滑な接続のために、入学前教育ならびにリメディアル教育を実施し、入学後の初年次教育（導入教育）や課外講座との連携を図った。

(8) 研究活動振興のため情報周知を行うとともに、公的研究費の適正な執行に努めた。

(9) 産業メンタルヘルス研究所を通して、産業衛生における調査研究とその専門性を確保するための専門家育成に寄与するため、①産業臨床教育の充実化、②産業メンタルヘルスに関わる調査研究事業、③メンタルヘルス支援事業、④研究所活動報告レポート発行を行った。

(10) 地域協働研究教育センターは、COC推進委員会とともに全学的に大学COC事業、COC+事業を推進した。主な取り組みは以下の通りである。

①全学必修科目の「地域入門」において、COC+事業との連携を意識し、地元中小企業の経営者やNP0など地域で活躍する社会人ゲストの講師招聘、地域で活動する上級生や地域で仕事をしている卒業生の体験談など、学習デザインやキャリアデザインについて、有効な動機付けを行った。2年次生以降が受講する現場実践教育科目の「プロジェクト科目（地域）」や「地域インターンシップ」において、地元企業や行政と協働して授業実施に取り組んだ。京都府山城広域振興局の寄付講座を継続実施し、公務員プログラムとの連携を図った。

②地域協働研究教育センターの「地域志向協働研究共同研究プロジェクト」5件、大学COC事業の「地域志向教育研究ともいき研究助成事業」で住民参画型が4件、産官学協働型が6

件の合計15件の研究プロジェクトを展開した。研究への学内外の参加者が、延べ117名おり、本学教員の4割強が継続して地域との共同研究に参加している。2月9日に合同成果報告会を行った。

③宇治市高齢者アカデミーや公開講座などの生涯学習事業を展開した。宇治市高齢者アカデミーでは、3～5期生72名が本学での科目履修、アカデミーアワー、卒業研究等に取り組んだ。本学の学問特性やCOC事業の地域協働研究と連動した公開講座として、「ともいき講座」を実施した（28講座合計で延べ1,631名が参加）。「宇治茶文化講座2017」は6回講座を開催し、参加人数は延べ340名で、各回定員を上回る申し込みがあった。京都市伏見区の事業である「伏見連続講座」へはフィールドワーク・体験型を中心とした計6講座を提供し、延べ137名の参加があった。その他、大学近隣の向島ニュータウン内での連続講座「向島団地大学ミニゼミ」では、地域の方々自身が講師を務め、地域のことをテーマに講座を提供する場を設けることができた。

④12月9日に『ともいき（共生）フェスティバル2017』を本学で開催し、本学の地域を志向した教育や研究の成果を地域住民に還元した。地元の小・中学生、障がい者の方々、地元企業、連携自治体、本学学生、平成30年度の入学予定者、京都文教短期大学の学生、卒業生、教員など、世代を超えた交流の場となり、観光のフォーラムや認知症に関する「ともいき講座」なども開催し、当日は約2,000名が来場した。

⑤ニューズレター『ともいき』を年4回発行した。

(11) 臨床物語学研究センターが実施した事業の概要は以下の通りである。

①中心事業として12月16日に石黒浩先生（大阪大学教授）、山折哲雄先生（宗教学者）、平田オリザ先生（劇作家、本学客員教授）を招いた公開シンポジウム「ロボットは宗教を持つのか？」を本学で実施し、約400名の来場者を集めた。

②6月7日には平田オリザ先生を招聘し、本学臨床心理学研究科の大学院生および教員を対象とした「セラピストのコミュニケーション能力を養うためのワークショップ4」を実施し、その模様を一般来場者に公開した。

(12) 人間学研究所が実施した事業の概要は以下の通りである。

①白石さや先生（東京大学名誉教授）を招き、本学教員との公開シンポジウム「日本発アニメ・マンガ文化のゆくえ」を1月13日に実施し、キャンパスプラザ京都にて約50名の来場者を集めた。

②共同研究プロジェクトとして「多様化する学生と大学英語教育」、「宇治の音風景」、「日本における海外の民間信仰と宗教の習合に関する現状調査ー中国ルーツの信仰を中心に」、「学生参加型のコミュニティワークにかかる実践的研究～子ども食堂に関するフィールドワークをとおして～」の4件を採択し、本学教員による学際的共同研究を支援した。

③本学の障がい者交流センター事業を所管した。

④人間学研究所紀要『人間学研究』を発行した。

(13) 心理臨床センターでは、以下の取り組みを通じて近隣地域への貢献と大学院生教育の充実・展開に努めた。

①地域減額措置で、近隣地域の中学生以下の親子を受け入れた。

②心理臨床センターの分室を烏丸丸太町から岡崎に移転した。

③新たな岡崎分室で京都文教中学校・高等学校との新たな連携関係を構築した。

④岡崎分室において、専任カウンセラーによる大学院修士課程向けのスーパーヴィジョンを、過年度より引き続き行った。

⑤公認心理師カリキュラム「心理実践実習」の学内実習先機関として、厚生労働省の手続きを完了した。

(14) 図書館ならびにPCルームは、充実した学習環境の提供および教育環境の構築に努めた。

(15) 海外の教育機関との交流としては、5月21日と5月23日にカナダ・トンプソンリバーズ大学のフィールドワーク学生グループとの宇治地域での活動、7月8日から7月15日にかけては中国・廈門大学嘉庚学院バスケットボール部とのスポーツ交流、1月下旬には米国・リンフィールド大学のフィールドワーク学生グループとの交流活動を実施するとともに、学生の交換

留学事業等の可能性を引き続き検討した。

## 2. 学生支援事業

- (1) 休退学率を低下させるための直接的な施策として、課題を抱えた学生を早期に把握するとともに、有効な対応策を迅速に提示する。同時に、学生の大学への帰属意識を高めるための環境整備として、①新入生が大学生活への円滑な移行が出来るような仕組みの構築、②課外活動をより一層活性化する施策を推進した。
- (2) 「京都文教大障害学生支援に関する規程」、「京都文教大障害学生支援委員会規程」を制定し、障がい学生の支援窓口として障害学生支援室を学生課内に設置し、業務を開始した。障がい学生へのインテークと修学上の合意形成がスムーズに行なわれる環境が整った。また総務課、障害学生支援室と障がい学生とが連携し、宇治キャンパス内のバリアの解消工事の年次計画が策定され、今年度はキャンパス内の誘導ブロックや段差の改良工事等を行った。
- (3) 東日本大震災復興支援活動は7年目をむかえ宮城県での活動を予定していたが、7月に発生した「九州北部豪雨」に対応し、9月10日から9月14日にかけて学生15名、教職員5名が現地で緊急支援（泥出し等）のボランティア活動を行った。
- (4) 健康管理センターを中心に学生および教職員の健康状態を把握し、必要なサポートが行えるよう、①学生および教職員健診の滞りない実施、②受診者増に向けた取組、③身体面や心理面でのサポート、④集団感染予防と感染拡大防止の取組を実施した。学生健診の受診率は学部ならびに院を合わせて86.8%で、前年に比べ5%増であった。教職員の受診率は、教員86.3%・職員96.7%であった。身体・心理面へのサポートについては、他部署と連携を取りながら、個々に対応していった。また次年度はより早期に対応できるような取組を検討した。集団感染については、今年もインフルエンザが流行したが大事にはいかなかった。また今後起こりうる感染症対策のひとつとして、入学予定者への感染症調査などの再考を行った。
- (5) 学生相談室では、これまで4年間の学生相談室運営の基本方針として次の項目を目標に挙げてきた。
  - ①これまで培ってきた地道、着実、間違いのない心理臨床実践のさらなる継続
  - ②従来の相談活動領域の拡大するための学生課、指導教員との連携、保護者面接の強化
  - ③相談室員のパワーアップとして、インテーク会議、事例検討会、自殺予防検討会を実施
  - ④相談室員のバックアップ体制の構築するためのスーパーヴィジョンシステム化
  - ⑤学生相談室活動を可視化するために教職員の相談室へ招待、相談活動の意味の説明努力また、かねてから懸案であった設備面（サロン室のエアコン設置、廊下の床の修復）が改善された。このために学生相談室周辺の雰囲気が明るくなり、学生が入室しやすくなった。これまで夏にサロン室の利用数が低下していたが、エアコンが設置されたことで、利用者数が増加した。

学生相談室は重要な役割を果たしているが、その活動が外部から見えにくいため、教職員に学生相談室の取組の理解を促すために、今年度も教職員を学生相談室内に招き、活動状況を紹介した。

## 3. 就職進路支援事業

- すべての学生の「自立し、かつ長期的に満足できる進路選択」に向けて、学科および研究科が主体的に取り組み、就職進路課と連携する体制を推進した。具体的には、①進路選択支援、進学支援、就職支援、②個別学生状況の把握、③学外ネットワークの強化、④関係部署との連携強化ならびに発信力の強化に向けて下記の取り組みを行った。
- (1) 春学期より3年次生を対象とした「進路・就職ガイダンス」（座学、講義形式）を、それに加えて秋学期からは少人数制の「就職対策講座」「就職塾」（演習、ゼミ形式）と学内セミナー・講座を企画・実施し学生の就職準備を支援した。2月には総仕上げとして「就活スタートアップセミナー」「ヴァーチャルリクルート」「就活決起会」を開催した。
  - (2) 4年次ゼミおよび3年次ゼミへ就職進路課員を担当者として配置し、ゼミ担当教員と連携して定期的に学生の情報共有の場を持った。そのうえで、就職進路課員全員で個々の学生の就職・進路状況の捕捉に努め、個々の学生に応じた進路支援を実施した。

- (3) 企業から本学へ直接依頼のあった求人情報に対して、4年次ゼミ担当者の情報を基に、タイムリーに学生へ紹介できるようマッチング機能の強化を図り、学生の就職率・企業の満足度向上に努めた。また、本学としてさらに関係を強化したい企業の採用担当者との交流会を月に1回のペースで開催した。加えて、これら企業とともに2月にはイベント「就活解禁前夜祭」を実施した。
- (4) キャリア教育および就職活動支援の一環として企業12社を学内に招聘し「業界・企業・仕事研究セミナー」を開催し、学生の業界・仕事への理解、進路・職業意識の涵養を図った。また、2月には14社による合同企業研究フェアを、3月に20社の個別企業説明会を開催した。
- (5) 正課の「キャリアと自己形成」(1年次)、「ソーシャルスキル演習」(3年次)の一部授業に就職進路課員が参加し、主に就職・進路に関する情報・実践ノウハウを提供し、学生の卒業後の進路意識の涵養に努めた。
- (6) 大学コンソーシアム京都インターンシッププログラムの受講生23名に対して、実習中の実習先中間訪問による指導、実習終了後の学内における報告会および経験・体験を共有するワークショップを開催し、学習効果の向上ならびに定着を図った。
- (7) ハローワークとの連携により、ハローワーク学内登録会・求人票閲覧会を6回、ハローワーク主催企業説明会を1回開催した。日本就職情報出版懇話会加盟企業であるリクナビ、マイナビ等を活用し、夏季インターンシップと秋冬インターンシップに係る説明会を実施した。
- (8) 京都橘大学、龍谷大学、関西外国語大学、桃山学院大学、大阪体育大学へ学生を派遣し、企業人事担当者を交えたプログラムへ参加することを通じて他大学学生との他流試合を奨励した。
- (9) 11月には本学と関係のある企業人事担当者様を招きし、学生との交流会「就活交流会 in KBU」を、さらに京都府中小企業家同友会伏見支部加盟企業様と3年次生の交流会を実施した。
- (10) 課外講座を見直し、以下の形態で実施した。
  - ①1年次より公務員、一般企業就職、教員、心理系大学院進学、精神保健福祉士資格取得の5つ希望進路別に開講した。
  - ②総合社会学部と連携し公務員試験対策講座(ともいき公務員養成講座)を実施した。
  - ③教育福祉心理学科と連携して教員採用試験対策講座と精神保健福祉士資格取得講座を実施した。
  - ④全講座を受講料無料で開講し、受講者数増を図った。
  - ⑤学習支援室と連携し個別指導講座を開講した。

#### 4. 学生募集に関する事業

- (1) 今年募集は、定員管理の厳格化や経済経営分野の人気復活など外的要因と入試ランクなどによるポジショニングを丁寧に行ったこと、臨床心理学科の初めてのコース募集開始小学校教員養成コースの実績の評価などが好感され、志願者が前年比のべ約1,000名増加した。平成31年度入試については、急激に入試ランクがアップしたことへの警戒感から敬遠される可能性が高いため新たな募集市場を開拓する必要がある。
- (2) 今年度は「京都文教によるしく」というアニメ冊子を多用し京都駅など公共の施設での配布やアニメ専門学校とのコラボを行い市場の拡大を行った。平成31年度も継続する予定である。
- (3) オープンキャンパス等において現役学生が大学説明・クラブ紹介などを行う学生広報チームを結成し2年目を迎えたが、アンケートによると年々満足度が上がり、入学生においても「現役学生との話や体験が入学の決め手になった」との意見が見受けられた。

- (4) フィールドリサーチオフィス、地域協働研究教育センター、産業メンタルヘルス研究所との連携や軟式野球部や女子サッカー部による社会貢献活動の浸透など地域における知名度をあげることに成功した。
- (5) 本学で開催した全国まちづくりカレッジにおいて近隣高校（京都府立すばる高等学校・田辺高等学校・木津高等学校）がパネル発表を行うなど高大連携がより一層進んだ。平成31年度以降は近隣だけではなく、滋賀県などにも社会連携ユニットとして事業を展開する予定である。

## 5. 大学財政基盤および管理運営体制の充実

- (1) 平成29年度は、多様化する事業に対応するため組織改編を実施し、業務等のスムーズな移行、教職協働体制の推進を図った。また組織改編と共に将来的な人員体制計画の検討に着手した。
- (2) 私立大学等改革総合支援事業等の選定要件を参考にし、規程等を中心に学内体制の整備を進めた。また、適正な予算執行がなされるよう学内の調整を進めた。
- (3) 障がいのある学生等のための環境整備として宇治キャンパスバリアフリー計画を策定し、必要な箇所の工事に着手した。

## 6. 地域・社会連携事業

- (1) 本学の建学の理念「ともいき（共生）」に共感し、インターンシップやPBL、事業所見学などを通じた学生の育成に、協力いただける京都府南部地域の企業、事業所等をネットワーク化する「京都文教ともいきパートナーズ（以下、ともいきパートナーズ）」を立ち上げた。この「ともいきパートナーズ」の意見交換会や京都中小企業家同友会伏見支部の産学連携例会において、インターンシップをテーマに学生と地元企業との交流を図った。「ともいきパートナーズ」の展開を通じて、地元中小企業でのインターンシップを核に、PBLや「初級地域公共政策士プログラム」との接続、就業支援へ発展させていくモデルとしての実績を積み重ね、京都府南部地域での「高・大・地・産」接続を進めている。
- (2) 宇治市や京都府との包括連携協定に基づき、地域および社会との連携を深めた。宇治市と本学、京都文教短期大学の3者で、連携協力懇談会、連携協力推進会議、連絡調整会議を定期的実施した。地域連携学生プロジェクト、サテライトキャンパス事業、宇治市高齢者アカデミー事業、宇治茶文化講座、伏見連続講座、向島ニュータウンまちづくりビジョン推進会議、伏見桃山中書島ゆらふプロジェクトなど、宇治市や京都府、京都市伏見区などと連携して事業を行った。京都府の「1まち1キャンパス」事業を活用し、京都工芸繊維大学、丹後機械工業協同組合の協力のもと、京丹後のものづくり企業を見学するバスツアーを8月に実施した。2月6日に、久御山町と包括協定を締結し、久御山町企業の見学ツアーを2月13日に実施した。また、新年度の久御山町役場、町内企業におけるインターンシップ受入にむけた調整を行っている。
- (3) 京都府内の大学と連携して、地域資格制度（初級地域公共政策士）「文化コーディネーター養成プログラム」「地域マネージャー養成プログラム」「グローバル人材プログラム」「グローバルプロジェクトマネージャー（GPM）プログラム」を運用した。これらのプログラムを通じて、地域が抱える課題に対して、行政や地元企業と連携した実践教育を推進した。「グローバル人材プログラム」「グローバルプロジェクトマネージャー（GPM）プログラム」では、京都中小企業家同友会の協力を得て、PBLに取り組んだ。
- (4) 昨年度に参画した「COC+事業」を推進するために、今年度からCOC+の就職・進路部会として、就職部就職進路課とフィールドリサーチオフィスとの定例会を毎月実施してきた。地域志向科目に関連した業務連携のために、教務課との定例会議の場を設け、共通教育委員会の事前打ち合わせも兼ねて、毎月実施した。今年度、事務局組織がユニット制に再編され、地域協働研究教育センター、フィールドリサーチオフィスが所属する社会連携ユニットにおいて、入試広報課、産業メンタルヘルス研究所とともに、「高・大・地・産」接続を推進するため、ユニット会議を毎月行った。

## 7. 大学評価に係る事業

各部局の計画書様式を統一し、取組の目的と評価指標を組み込んだ計画を立案する仕組みに基づき自己点検・評価を実施した。

## 8. その他

- (1) 高校教育と大学教育の円滑な接続のため、アドミッション委員会ならびにアドミッションオフィスを新たに設置し、新たな入試執行体制を整備すると共に、入学前教育プログラムから新入生オリエンテーションまで一貫したプログラムを設計に着手した。また、京都文教高等学校・中学校との連携をさらに強化するため、アドバンスト・レクチャー・プログラム (ALP) の見直しを行った。
- (2) ホームページの一層の充実を図るとともに、SNS等を活用した大学の広報活動を積極的に行った。

以上



# 京都文教短期大学

建学の精神を基盤とした教育を進め、知識・技能の習得のみならず、社会人基礎力を身につけた有能な人材を育成し、社会のニーズ並びに地域社会に貢献する事業を行った。

学長のリーダーシップのもと、短期大学の改革を推進した。

## 1. 建学の精神の涵養：

(1) 総合教養科目の「自校史を学ぶ」、「仏教学入門」で建学の精神である「三宝帰依」の精神を理解することによって、倫理観や自己管理能力を涵養した。「自校史を学ぶ」のテキストを用いた授業では三宝帰依の精神、即ち「謙虚にして真理探究」「誠実にして精進努力」「親切にして相互協同」の建学の精神を深く理解し、人間力の向上を図り、健全にして有能な人材を社会に送り出すことができた。

また、学生、教職員に対して宗教情操の涵養を図る諸行事を大学・短期大学合同宗教委員会で事業を計画（大短新入生祖山参拝、培根アワー、尋源研修、座禅会、写経会、成道会、物故者追悼会、動植物慰霊祭、涅槃会、観音菩薩のお身拭い式、講演会等）し、学年暦に沿って実施した。また、学長のご縁で、大石順教尼の没後50年の節目に、関係者が十一面千手観音像造立を発願され、順教尼のご親族、教職員、学生、地域住民の参加を得て、最勝殿にて一刀三禮の儀を執り行った。観音立像は平成30年11月に最勝殿に奉納されることになっている。

## 2. 教育・研究の充実と活性化のための事業：

(1) SD 研修の位置づけで高等教育に関する基礎的な知識・理解等を深めることを目的として、係長以下の事務職員に「短期大学に関する法律、基準、資格の規程等の理解」に関する研修を行った。「教育基本法」「学校教育法」「学校教育法施行令」「学校教育法施行規則」「私立学校法」「短期大学設置基準」の概要を解説し、「教育職員免許法及び同施行規則」「児童福祉法及び同施行規則及び施行令」「栄養士法及び同施行規則」に基づく申請書類の解説を行った。

また、係長以上の事務職員を対象に社会から信頼される短大を目指して「改革総合支援事業の獲得に向けて」（タイプ1）建学の精神を生かした大学教育の質向上、（タイプ2）特色を発揮し、地域の発展を重層的に支える大学づくりの2グループに分かれて討議した。係長以上のSD研修はFD研修も兼ねることになり、多数の教員が参加して議論がなされた。本学の教育改革に向けて教学協議会規程の改正やIR委員会規程の制定に取り組み、年度末には進捗状況を確認し、教育の質保証に向けて前進した。

(2) 7月に株式会社ハウインターナショナルから講師を招き、3つのポリシーの関連、教育の質保証、学習成果の可視化について講演を頂き、活発な質疑応答を行った。

(3) FD活動は昨年度に引き続き授業研究会を進め、外部の研修会、FD・SD研修に積極的に参加した。3月には「単位制度の実質化」と「成績評価の厳格化」を図る観点からルーブリックの導入・活用を試みて、「学生が身につけるべき力の明確化を目指してルーブリックの活用を考える」についての研修を行った。ルーブリックの基本的内容と各学科からの事例報告、ルーブリックの試作を行った。

(4) 科学研究費等に応募を勧め、外部資金を導入した研究を推進したことで、研究代表2件、研究分担3件となった。研究代表者、研究分担者で研究に取り組んだ教員は4名であった。

## 3. 学生支援事業：

(1) 「障害者差別解消法」において、障害者への不当な差別的取扱いの禁止や合理的配慮の提供が義務ないし努力義務とされた。障害学生支援の理解啓発と支援体制整備を課題として取り組む中、複数の規程を改正した。年2回の研修会を開催し、教職員の障害学生

支援への理解啓蒙を推進して障害学生支援の認識を深めた。

- (2) 昨年度から実施した学生同士あるいは学生と教員のコミュニケーションを学科独自の行事を通して深める「コミュニケーションアワー」を4月の指月アワーを利用して学内で実施した。
- (3) 同窓会あおい会奨学金の第1種奨学金をⅡ回生に23名、Ⅰ回生に20名に給付し、同じく第2種奨学金を2名に給付した。また、月影奨学金を31名に、カナダ短期留学奨学金を26名に給付し、プラバー奨学金を5名に給付した。その他、浄土宗立宗門学校奨学金を10名に、知恩院奨学金を3名に給付した。
- (4) 学生の防犯・防災意識向上、通学時の諸注意の喚起、社会的責任に係る学生厚生補導の強化を京都府警察本部・宇治警察署の協力により実施した。入学時及び後期開始時にⅠ回生対象で「防犯教室」「生活安全(日常生活、学生を狙う日常トラブル)」「交通安全」「消費生活」等リスク管理の必要性を周知した。

#### 4. 学生募集に関する事業：

- (1) 入試情報の発信、学内情報の発信を効果的に行い、広域的に知名度アップを図り、社会に、高校に、生徒にアピールした。また、志願者増を目指し、推薦入試Ⅲを新たに実施した。
- (2) 学則第42条の入学検定料を定めた、別表第6の検定料を広報活動の活性化、志願者減少の対策として、志願者の利便性を高めるためにWEB出願を全入試において導入することを決定した。

#### 5. 短期大学の財政健全化：

- (1) 定員割れの学科を是正し、総収容定員はそのままに学科の入学定員の見直しを行い、文部科学省に届出を行った。
- (2) 学園の中長期経営改善計画策定に短大より2名を指名し、計画策定に取り組んだ。主に短期大学の現状分析を行い、教育研究、財政、人事、施設設備の4つの視点から(1) 仏教精神に基づく人間育成、(2) 大短一体型学生支援の構築、(3) 大短接続、(4) 入学定員の見直し、(5) 事務組織の見直し、(6) その他の教育研究関連、(7) 財政基盤の策定を行った。

#### 6. 地域連携事業：

- (1) 宇治市市民環境部ごみ減量推進課の委託を受けて、宇治市政策共同研究の補助金で「食育活動によるごみ減量化の研究」を行った。研究には食物栄養学科の学生が共同研究指導教員、宇治市政策推進課、ごみ減量推進課、健康生きがい課課員とともに卒業研究の授業の中で、課題解決型授業の手法で共同研究を実施した。
- (2) 尋源池の蓮が減少していたところ、宇治市植物公園の曾和園長に学長が巨椋池由来の花蓮の提供依頼された。宇治市植物公園より8種類の花蓮が5月に贈呈された。いずれも巨椋池縁の花蓮は7月に咲き誇り、茶道部のお点前でお茶を頂く蓮見の茶会を催した。高齢者アカデミーの方や、教職員、学生が参加した。
- (3) 京都府民の健康の保持・増進を図る事業「産学公連携によるプラットフォーム事業」に参画した。大学・企業・行政が連携して研究開発を推進している。宇治市健康長寿部健康生きがい課、典座、平和堂、京都府山城北保健所が構成メンバーとなって「手軽で美味しい減塩食」の推進事業を行い、3月に「手軽で美味しい減塩食のススメ講演 in 宇治」をサロン・ド・パドマで実施した。

- (4) 「久御山町と京都文教大学並び京都文教短期大学との連携協力に関する協定」の協定書を2月に締結した。この協定は久御山町と京都文教大学並び京都文教短期大学が包括的な連携のもと、まちづくり、教育・文化、子育て支援、産業・観光の振興等の分野において相互に協力し、地域社会の発展と人材育成を目的としている。今後は地域連携室が中心となり地域貢献を進める。
- (5) 本学客員教授杉本節子氏を特別講師に招き、秋の特別公開講座「ユネスコ無形文化遺産登録ーにみる『和食ー日本人の伝統的な食文化』と食育」を10月に開催した。
- (6) 宇治市役所食堂で「脂質異常症予防ニュー」の提供、学内食堂で成道会に合わせ「文教ランチ〜成道会バージョン」の提供、浄土宗寺院善導寺で五重相伝に合わせた「精進料理弁当とデザート」の提供、宇治橋通りわんさかフェスタ、宇治市健康づくりイベント〈うー茶ん〉フェスタの参画、ふれあい JA まつり参画、大学主催の「ともいきフェスティバル2017」で《Light Chidren》《ともいきヘルシーランチ》《おやこサロン》の参画、六地蔵ショッピングセンター「音を楽しもう！」の参画等を学生、教員が参加して行った。特に、和束町「茶源郷まつり2017」のお茶スイーツコンテストでは最優秀賞と優秀賞を受賞した。  
また、浄土宗宗門関係大学社会連携企画報告会・シンポジウムで学生が日頃の社会連携活動や取組事例を報告した。
- (7) 子育て支援室「ぶんきょうにこにこルーム」では短期大学の学生が手遊び・絵本の読み聞かせ・手遊び・音楽で楽しもう等、様々な企画を考え、年間を通して親子共々で楽しく遊びを行った。また、宇治市ごみ減量推進課の「パッカー車が来るよ」、宇治市中央図書館の「出張おはなし会」、キッズいわき・ぱふさんの「世界のおもちゃであそぼう」、親子リトミックポコアコの「親子リトミック・ポコアコ」、人形劇サークルの「とらごろうサークルの楽しい人形劇」等、外部の多くの皆さんによる催しが行われた。
- (8) 宇治市高齢者アカデミー5期生を短期大学では7名を受け入れた。また宇治市高齢者アカデミー生、卒業生が学内で活動できる拠点に7109演習室を提供した。

## 7. 短大評価に関わる事業：

- (1) 本学が公的な教育機関として、社会に対する説明責任を果たすとともに、本学が追求している教育の質向上の取り組みを「大学ポートレート」により積極的に公開した。
- (2) 短期大学基準協会の様式に基づいた「基準Ⅰ 建学の精神と教育の効果」「基準Ⅱ 教育課程と学生支援」に関し、平成28年単年度の自己点検・評価を行った。
- (3) 短期大学事務組織を改正し、平成30年度から学長企画室を設けることとした。学長企画室では短期大学将来構想に関すること、IR 業務に関すること、自己点検・評価（第三者評価を含む。）に関すること、短期大学の制度、組織、諸規程等の制定及び改廃に関すること、官公庁への認可、届出、報告等に関すること、SD の推進に関すること等を遂行することを定めた。

## 8. 施設・設備事業：

- (1) 月照館3階 M309情報処理演習室のコンピュータの入れ替え、大講義室の映像音響施設の整備、がくえん・ユニバシステムバージョンアップを行った。

## 9. その他：

- (1) 同窓会（あおい会）の奨学金支援、保護者会と連携して教育環境の整備や学生主体の活動等に支援を行った。

以上

# 京都文教高等学校・中学校

## ★基本方針

生徒の学校生活での満足度を上げることを念頭に【建学の精神】のもと情操豊かで向学心溢れる生徒を育てるために、礼拝や各種行事、日常の生徒との関わりを通して全教職員が結束し日々教育に取り組んだ。

★**中学課程**では校外学習や遠足等の行事など、自然や社会の現実に触れ文化・芸術を通して考える力・発信する力・感性を養う取り組みを行った。「ASEM」や「すらら」を通して6年後の大学入試に向け英語学習の一層の強化に努め学力の定着・向上をはかった。

また、2020年の大学入試改革に向けて、探究型授業の調査研究を行い、骨子を完成させた。

★**高校課程**では各コースの特徴を活かしたキャリア教育を推進するため、複数回に及ぶ進路説明会や大学訪問、キャリアガイダンス等を行った。これらにより進路目標を明確にし、日々の学習において積極的に取り組むよう指導した。

## ★全体

1. 安心・安全な学校づくり。
  - ・相談窓口の設置、研修の実施、生活アンケートの活用により、授業、部活動、諸行事等の教育活動において、決して体罰を許さない意識の徹底を図り、事案が発生することはなかった。
2. 基本的な生活習慣の定着・家庭学習の定着。
  - ・生徒指導部と担任が生徒一人ひとりの出欠状況を共有し、怠惰による遅刻、欠席を減らす指導を行い、一定の成果を得た。
  - ・監督教員を適正に配置し、校内の清掃美化の徹底を図った。
  - ・教員から率先して校内での挨拶励行を行った。
3. 中学校での良好な人間関係の構築（宗教情操教育の充実）。
  - ・各種課外学習について「事前学習」「実施」「事後学習」のサイクルを徹底し、計画的・体系的に行った。
  - ・菜園実習を通して、協働の大切さを実感し、命の大切さを共感できた。
  - ・クラブ活動全員参加を必須化し、先輩後輩という人間関係の構築に努めた。
4. HR（ホームルーム）活動の改善、集団における個々の責任感を育成。
  - ・年間計画に基づくHR運営を行い、意図的な秩序あるHR集団の形成に努めた。
  - ・学習習慣、生活習慣の定着、教育環境の整備（掃除の徹底）を行った。
  - ・担任からの働きかけを行い、行事への積極的参加につなげた。
  - ・保護者との連携を重視し、協力して生徒の育成を実践した。
5. 英検・漢検の資格取得。MQ朝学習の充実。基礎学習の定着を図る。
  - ・平成29年度保持級人数

英検	準1級	2級	準2級	3級	4級	5級
中学		1	14	43	70	52
高校	3	63	220	350	31	30
漢検	準1級	2級	準2級	3級	4級	5級
中学			8	23	42	85
高校		27	152	275	38	47

6. 国際英語専攻生徒の育成。
  - ・本年度、国際英語専攻の一期生が卒業、全員英検2級を取得した。

TOEIC スコアは入学時より平均 344 ポイント向上した。

TOEIC ポイント	510～585	625～675	765
人数	4	4	1

7. 京都文教大学、短期大学との連携システムの充実。
  - ・昨年度に引き続き、現状の問題点を検証し、以後のシステムの見直しを行った。
8. 進路実績の向上（体系的な進路学習、指導体制の構築）
  - ・進路指導部を中心に、担任・CC主任が連携し、指導を行った。
9. C・C主任（コース・クラス主任）の役割強化（コース毎の取り組みによる学習意欲の向上に努める）。
  - ・コースの目標を明確にし、コースの特徴を活かすべく学習指導、行事活動、キャリアプログラムを含む進路学習、進路指導を行った。
10. 教科指導力向上（FD）の活性化。
  - ・授業アンケートの検証やスキルアップ期間を設定し、他教員の授業見学などを行い、自らの授業スキルを高める取り組みを行った。
11. 学習サポート体制の強化（高校サポートセンター・bururu コーナーの活用）。
  - ・中学生の学力、能力を向上する目的で、bururu コーナーをさらに利用しやすい環境を整えた。
12. 生徒募集事業の強化
  - ・中学校 ACT 広報のため中学入試向け見学会を増やした。また、オープンキャンパスのイベントの見直し、校外説明会の場所等積極的な展開を行い、広報に努めた。
13. 学校評価の実施・活用
  - ・生徒によるアンケート、学校生活アンケート、入学者対象アンケートを実施し、検証結果を学校運営、生徒募集事業に利用した。
14. 設備事業関係
  - ・自立学習支援プログラム「すらら」導入及び Wi-Fi ネットワーク設備整備工事
  - ・正道館・5号館（一部）GHP 更新工事

# 京都文教短期大学附属小学校

仏教情操教育を基盤として、「知・徳・体」の調和のとれた豊かな児童の育成を目指し、「明るく・正しく・仲よく」の生き方を培う教育活動を推進する。

## 《1》教育・研究の充実と活性化のための事業

### 1. 宗教情操教育について

宗教情操教育では、私たちが「明るく・正しく・仲よく」という仏様の教えを守る「仏の子」となり、精進努力することを、学校の教育活動全体を通じて創建以来推進し、今後とも変わることなく踏襲していきたいと願っている。

毎週水曜日に実施している礼拝の後、各学年では「月影」と名付けた宗教道徳の授業を行っている。これは、知識・理解の教化ではなく、体験・会得の感化によるものである。この授業では、行事や児童会活動と教科学習を横断的に関連付け、「共生・人権・命」を内容とする総合単元的学習の要となっている。

特に、児童会活動には縦割り活動を組み入れ、「やさしい人になってほしい」という願いのもと、児童が児童に学ぶ主体性の確立と、児童が児童のお手本となる関連性の進化を求めるという二面性を持ち、「共生活動の基礎」を培っている。この縦割り活動は、蓮華の花が群生に支えられて自己の伸長があり、また、自己の伸長が群生を創り出していることから「れんげ活動」と名付けている。子ども達には「花咲山」の物語から「縦割り活動では下学年のことを思い、時に辛抱や我慢をして、会得・感化された時、自分の中に一輪の花が咲いていることを実感する」という活動の意味付けをし、実践につなげてきた。

主な実践内容は、以下の通りである。

- ① 「れんげデビュー集会」……全校集会、縦割り班の初顔合わせ。4月
- ② 「知恩院参拝」……4月／進級入学報告、2月／自己成長報告。
- ③ 「ウキウキウォーキング」……縦割り班で実施、ミニ遠足。5月
- ④ 「れんげスクールランチ」……各学期末に1週間の縦割り班での給食時間
- ⑤ 「れんげ全校遠足」……縦割り班で実施。10月
- ⑥ 「ボランティア集会」……バザーでの活動、5年生、6年生。10月末
- ⑦ 「盲導犬育成への支援」……4年生総合学習、児童会募金贈呈。11月
- ⑧ 「月かげ集会」……命を見つめる児童会総会。12月
- ⑨ 「お年寄りの方との交流学習」……3年生。2月
- ⑩ 「6年生ありがとうの会」……全校集会。3月

### 2. 各教科・行事等による学力の向上について

- ① 今年度は研究テーマを「言語力育成プロジェクト」と名付けて、「朝ねっこタイム」「昼ねっこタイム」（ともに15分間）の中で、基礎基本の完全習得を目指して取り組んだ。また、放課後「のびっこタイム」で補充学習を実施。
- ② 算数科では、1～4年生において少人数（2グループ）指導を実施。  
5年生・6年生では、習熟度別のクラス編成で受験学力に対応した授業を実施。
- ③ 低年生を中心に、ノートでの自主学習で家庭学習力を付ける取り組み。PDCAサイクルを子ども達に教え、計画・点検・改善の意義を指導。家庭の協力も得て、低学年で継続している。集中力と丁寧さの態度形成と、毎日、宿題の後に30分間という習慣形成をねらいとする。中高学年は、自己マネジメント力の育成をねらいとする。
- ④ 全児童の1年間の話す力の発信の場として、2月の作品展において親子作品鑑賞会を持ち、自分の作品や友達の作品について、意見交流や評価を行う。
- ⑤ 思考力・表現力育成の一環として、月かげ集会（全校集会）を持ち、学級活動で鍛えた発言力、議事進行の力、ロールプレイ等の表現力等を育成。

### 3. 茶道を通じた「礼法学習」について

1年生6時間、2年生8時間の茶道を通じた礼法学習を実施。  
裏千家学校茶道「淡こう会」から、2名の先生と1名の助手を招請。  
多目的室に畳を敷いて実施。また、中高の茶室を借用してのイベントも1回実施。

### 4. 英語学習について

- ①. 1年生～3年生においては、ネイティブ教師1名と英語専科教師1名で指導し、4年生～6年生では、英語専科教師1名で定着を図った。
- ②. 2年生以上で、週2時間の英語授業を行い、英語教育の充実を図った。
- ③. 各学年で週1回15分の「ねっこイングリッシュ」を実施。
- ④. 木曜日の放課後は、1～3年生を対象にした午後4時から20分間のASE（アフター・スクール・イングリッシュ）を実施して、児童の興味関心を高め、習熟を図った。
- ⑤. 3年生～6年生は、通知票に英語評価を表記した。

### 5. 総合的学習（3年生以上）について

児童は、課題解決や探究活動に主体的に取り組み、チームワーク力や調べ方まとめ方を身につけ、その成果を発信する「学びと力の発表会」において表現力や創造力を育んだ。

### 6. 情報教育について

- ①. 1年生からパソコンの起動やマウスをつかっでの操作学習を実施。
- ②. 3年生からローマ字入力のキーボード操作に取り組んでいる。それによって、年度末の文集「蓮華」原稿を、パソコンで作成。
- ③. 高学年では、インターネット検索を学習し、ネットのエチケットなどを学習。図鑑や辞書・辞典の活用についても、カリキュラムとして盛り込んで実施。

### 7. 体力増進について

- ①. 全校で週1回、中高グラウンドを借用して「10分間マラソン」を実施。
- ②. 「水泳学習」は9月初旬の2週間、中高の温水プールを借用して実施。
- ③. 自由参加の課外活動として、毎週火曜日と金曜日の放課後の25分間、サッカー、バレーボール、卓球の「スポーツ教室」を実施。
- ④. 野外学習は、4年生「琵琶湖自然教室」、5年生「大江山自然教室」を実施。

### 8. 「食育」について

- ①. 完全給食を実施する中で、仏教の「食作法」を基本として、心豊かに天地の恩恵に感謝し、体力の増進と共に、生活リズム、「食」を通して「報恩の念」を育ててきた。
- ②. 給食時間は、1年生から当番活動に取り組み、衛生面での配慮や勤労の大切さ、自主性、責任感などを培ってきた。

### 《2》教職員研修のための事業

- ①. 思考力・判断力・表現力を育む授業立案実施と、評価自作テストを作成。
- ②. 本校の「いじめ防止基本方針」をもとに、いじめアンケートとして学級力向上プロジェクトに取り組み、未然防止と早期発見につなげる研修を実施。
- ③. 学校評価での各項目の観点を共通理解し、適正な自己評価力を持つことを研修。

### 《3》児童募集に関する事業

- ①. 本校の児童募集イベントとして「文教小 GOGO ランド」と銘打ち、5月から7月の間に「親子スタンプラリー」「学校見学会」を実施。
- ②. 「文教小プレテスト」を実施。実際の入試に近いテストを体験することにより、本校への志望を高める一助にできたと考えている。
- ③. 「入試説明会」をに実施。
- ④. 本校HPを昨年3月に刷新し、各学年の学習の様子などを毎日更新している。
- ⑤. 今後の対策として、入学辞退者数を減らしていく方策を考える必要がある。  
辞退者内訳／同志社1、立命館2、聖母3、教育大附属4

平成30年度生《入試結果》												
項目	A 2017/9/2			B 2017/10/14			C 2018/01/27			総合計		
	男子	女子	合計	男子	女子	合計	男子	女子	合計	男子	女子	合計
応募者数	15	11	26	6	1	7	1	3	4	22	15	37
受験者数	15	11	26	5	1	6	1	3	4	21	15	36
合格者数	15	11	26	5	1	6	0	3	3	20	15	35
辞退者数	7	2	9	1	0	0	0	0	0	8	2	10
入学者数	8	9	17	4	1	5	0	3	3	12	13	25

平成30年度 新1年生入学予定者／全25名（男子12名、女子13名）

#### 《4》学園との連携に関する事業

1. 京都文教短期大学《食物栄養学科》との連携について  
9月と2月のそれぞれ1週間、栄養士実習を受け入れ。
2. 京都文教大学《文化人類学科》との連携について  
①. 6年生は、播教授の「中国」についての特別授業を実施。
3. 京都文教大学《臨床心理学科》との連携について  
①. 学生の小学校行事の参観見学について、発表会Ⅱ（11月）を約40名の学生が見学。  
後片付けの助勢と評価アンケート記入を依頼。

#### 《5》その他の事業

1. 「アフタースクール」の開設（新規事業）  
平成29年度から、放課後の学童保育を行うアフタースクールを、完全外部業者委託で開校した。最長午後7時まで。長期の休業期間（夏・冬・春）も開設している。
2. 平成29年度卒業生の進路状況の報告  
卒業生37名。内部進学者15名。以下は外部進学者22名。

洛星中学校	1名	粒西京蔭学校附属中学校	2名
東山中学校	3名	同志社中学校	3名
京都産大附属中学校	2名	同志社女子中学校	3名
大谷中学校	1名	京都女子中学校	2名
立命館中学校	1名		
立命館守山中学校	3名	公立中学校	1名



# 京都文教短期大学附属家政城陽幼稚園

本園の教育方針である『仏教精神に則り、情操豊かな人格の形成と知・情・意の円満なる発達を目的とし、特に本学園の建学の精神、明るく、正しく、仲良くする』ことを基本として、“やさしいひとになってほしい”と願い、日々の保育を推進。

## 1. 教育方針

- ・明るくすなおな子ども
- ・自主性のある子ども
- ・創造性豊かな子ども
- ・まじめに努力し最後までやりとおす子ども
- ・友達と協力する子ども
- ・たくましい中にもやさしさがある子ども

以上の内容を目指す子どもの姿とし、教員が意識し、日々の保育に取り組んでいる。

## 2. 本年度教育目標

### ○子どもの「心もち」に寄り添う保育

子どもの心情・意欲・態度をどう受け止めていくか。心情とは、喜怒哀楽や感性、感じる心。意欲とは、何かをやりたいという気持ち。態度とは、やりたいことに粘り強く取り組むこと、友だちと協力すること、挑戦すること。教員がしっかりと子どもと向き合うことで、子どもたちの心に共感的であり、洞察的であり、温かさを感じる肯定的に理解することが、とても大切である。

### ○保育の質の向上

- ・日々の子どもの様子と課題を園内で共有しあい、具体的な目標をもち、保育に取り組んでいる。教員同士が気軽に話し合いの場を設けること、共通理解すること、それぞれの保育の優れた点を認め合うことで日々の保育の質を高めていけるよう努めた。

## 3. 子育ての支援

### ○未就園児親子教室『いちご組』3年保育入園前の年齢の幼児限定。

入園までの6月～3月までの期間、週1回(水曜日)親子で登園し、幼稚園に慣れるためのプログラムを取り入れた保育を実践。平成29年度は、月曜日コースと水曜日コースの選択制。定員は各曜日15組、計30組として実施。

### ○『ぱんだクラブ』月1回土曜日 全8回実施。親子で遊ぼう。未就園の親子対象。

参加者のべ人数150名。今まで次に入園を控えた年齢の子どもたちが参加していたが、29年度の傾向として、参加者の年齢が1歳半～2歳と1年早く参加することが増えてきている。(参加者全体の62%)

#### 4. 施設・設備

##### ①園内電気(蛍光灯)のLED蛍光灯へ取り替え工事

LED蛍光灯に替わり、電気料金の削減ができ、照度はアップし、明るくなった。



- ②園庭遊具(丸太チャレンジクライミング)の購入  
老朽化した以前の遊具に替わり、子どもたちは喜んで遊んでいる。

